



報 奇
讎 談

自來也說話

~ 13
3329
1



13
3329
1

近世稗史小說行。而文人詩客各玩之。措几案。仿
世人做頻單。而欲續華人之稗史小說。不慣文辭。
則其義難通。故續記。本邦忠魂義膽貞女烈
婦之事。做小說者。慰雨消暑。是以坊間書肆。爭
就作者。徵其書。以鐫梓。故作者亦如雲。互競其巧。
是以作者巧拙相爭。猶群猿攀樹。各指其尻。以
笑也。余与感和亭主人相騷久矣。今茲乙丑暮春。
偶同友人賞花於墨水。歸途出于淺草。以舊
誼訪感和亭。雅談移刻。遂出所著自來也說。

話者。請序其端。時余將有遠行。且朱輪輾西。不遑續了。乃畧聞其事。強乎惡者。復強乎義。古人之言不誣也。自來也者。綠林之豪客。然其終歸義。頗有懲勸之補。主人著一片婆心。編此書。使續者為太上感。應篇云尔。

蘭洲東秋賦識



大正十年八月廿九日寄
本大學出版部贈



萬里野破魔之助
保利

勇源太一郎
正村



鹿野苑軍太夫
景國
復五十嵐典膳
後鬼首剛左門

美鳥

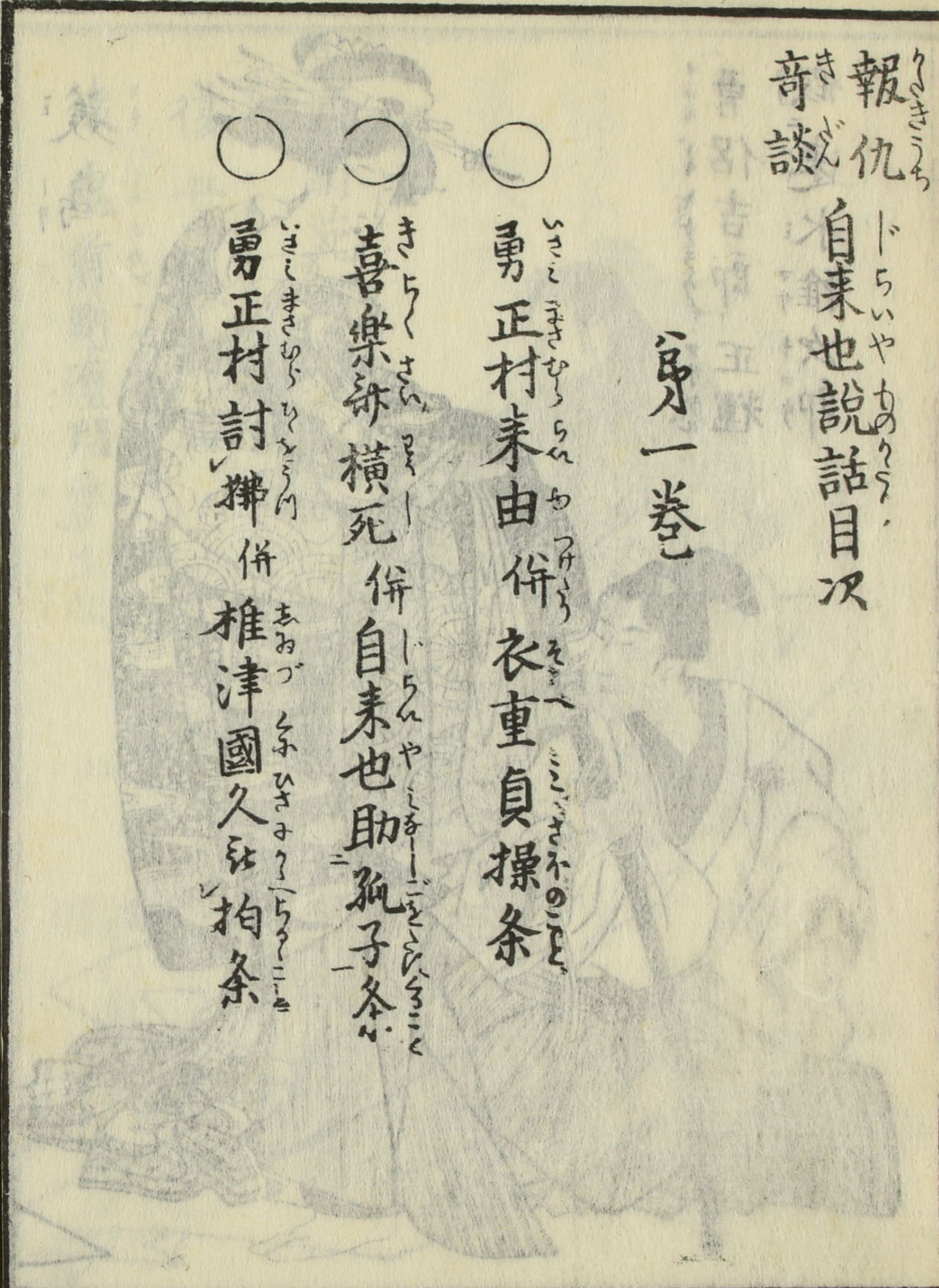


勇侶吉郎正輝
假速水雅次郎

報仇くつきうち 自來也說話目次
奇談きだん

身一卷

- 勇正村末由いさこまきむらうらぬ併あひ衣重えしむ負操ふさく条じょう
- 喜樂きらく糸いと横死よこじ併あひ自來也いらいや助すけ孤子こし冬ふゆ
- 勇正村いさこまきむら討う拂はら併あひ推津國おゐづくに久ひさ紅べに拍は条じょう



身二卷

- 正村まさむら景國かげくに為な同役どうやく併あひ自來也いらいや詮義せんぎ条じょう
- 名越なごへ長なが兵清へいせい女兒むすめ正村まさむら為な養女やしやうにょ併あひ自來也いらいや遊而あそび
- 弘ひろ擲な捕と自來也いらいや何なに併あひ以智いぢ破や囚う獄ごく条じょう

身三卷

- 勇正村いさこまきむら逢あ衣重えしむ併あひ景國かげくに謬言みうげん条じょう
- 正村まさむら衣重えしむ復たがひ拳こぶし併あひ速水すみずみ雜次郎ざつじらう条じょう

序四卷

五十嵐曲膳與朝妻歌之助比試併速水

雅次郎水練条

第五卷上

自来也各加邑晋彦家揆入 併 天眼磁多傍与

夜双嵐相撲条

第五卷下

鏡浦復讐 併 男侶吉推津家為臣下条

報仇 奇談

自来也説話卷之一

武江

感和亭鬼武者

高喜齋校合

勇源太郎由来由併衣重貞操条

善不積不足以成名惡不積不足以滅身小人以小善為

无益而弗為以小惡為无傷而弗去之 周易下繫の

辭傳也此小往昔信濃乃因伴那の郡麻績お里に勇源太郎

正村といふものありそ祖先の武功乃おきて代り足利の幕下

村上家子は下が祖父此頃より所の次子ありて民間に

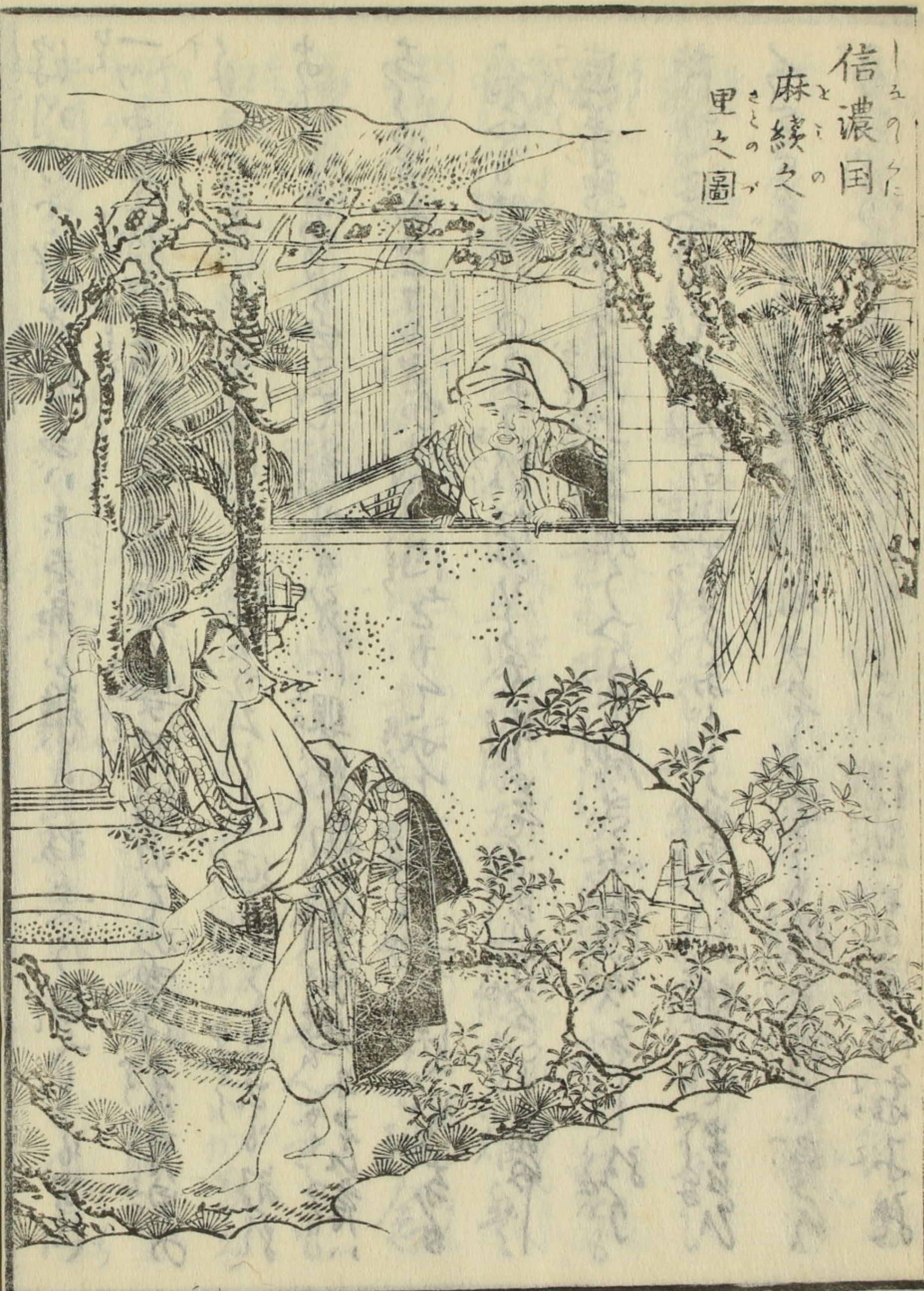
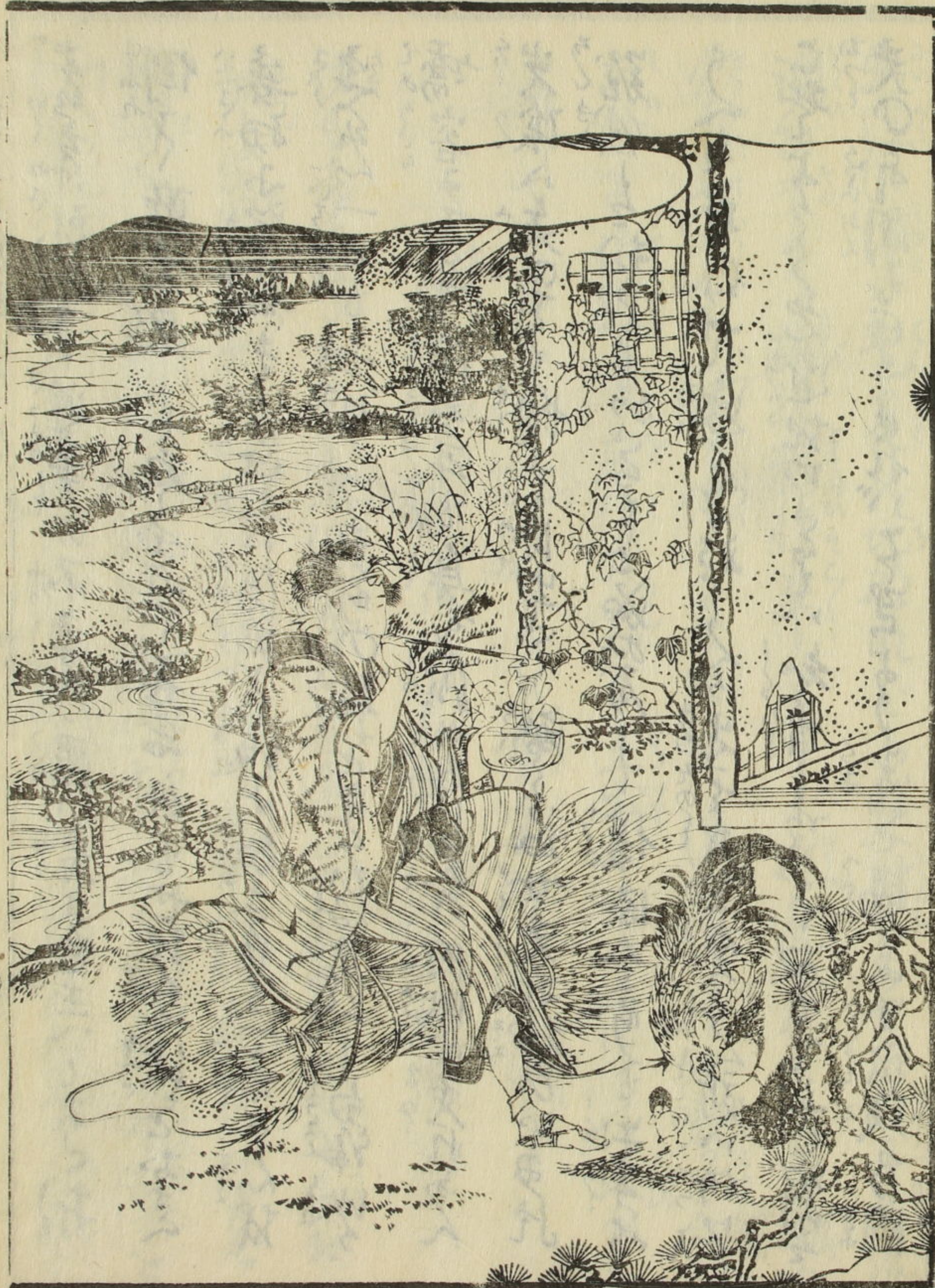
今ハ女氏と稱りは里子位ありりしが親ハ判官友一と音示す

して七旬ちちう近ちかく妻つまを衣え重おもと吸すく二十余にじゅうよ容ゆる顔かほこゆる
 妹いもうとく二ふた文ぶんの男おとこ子こ一いち個こりり名なは侶りよ吉きちとよふ然しかる源げんを而を
 之これ如ごとく文武ぶんぶの道みち不ふ志ししとふく孝こう心しん乃の者ものまていむいぶい歳さい
 三十さんじゅう不ふ満まんび血ち気き此この形かたちきども近ちか来きハ名な作しやくお績しん
 終つひの因いん烟えんも終つひ氏し招まね入れ強つよ少すく地ぢ耕かう作しやくして親おや子こ四よん
 暮くれの夕ゆふ乃の文武ぶんぶ乃の乃のも金かね急いそふ海うみそと百姓ひやくしやう一いち三さん昧まい子こ精せい力りき
 をいりしと心こころても朝あさ夕ゆふ能あたくは煙けむりも終つひくまあれをあのの心こころ
 年とし々々祖そ税ぜいの末すえ進しんも洋やうぬ身みそと國くにの政せいの縣けん入いる廳てい子こ
 百ひやくれ弘こう明めい此こ上かみ多おほく急いそ末すえ進しん相さう遠えんつらとさとぬ曲まがこと
 ありとくつおふ囚あ獄ごく此こ身みとあとぬ形かたちけりしらばあとり

残のこる親おや喜き樂らく終つひ妻つまの衣え重おもりるとも誓ちかせぬおとび這こ者もの
 口くち滿まん才さい々々身み往い古こハ由よし有あり士し此こ形かたちけりと落おち魂たまたきををとと
 びびぐれ令さし子こ不ふ法ぽうり憂うれ目めををこことと世よににおとささぬ形かたちれ志しくハ
 何なにれと令さし子こ何なにくぬと涙なみだをを所ところの艱く苦くをを救たすかかここともとは
 加かへへ終つひやせん角かくやと想おもへども老らう人じん女に子このの儀ぎハ
 一いち令さしのの也や是こもあとるれど妻つまハ舅きう在ざい末すえ終つひおむららひ
 中ちゆうやうかかくぬ形かたちも若わか世よの約やく速そくとハ申まをぬとも眼がん前ぜん
 夫おつと乃の疑ぎふふ以もつ妻つまの身みとくとてよよおとふと人も乃の乃の乃の乃の乃の
 むむううより親おや夫とののあとると身みをを賣うる艱く難なんををあとりの
 士しののあとるとももたためめハ形かたち此こもあとると人じん妻つま不ふ来き終つひ

生れあれども何れも怪れ勤むるも身をもたす可く
 中まゝあつて身乃代をとりて未だを借ひ夫乃親を
 救ひ玉れしと打歎きぬれを在末跡も涙もむせむ
 結も中せしありきも其んはらざる中らあはねども
 汝がん嫁も汁もぬれ且兒子原を帝も能令難を
 諒るとも武士の累あはば妻も勤むせんこと残念
 ありありあらん我れも嫁子身を愛むせんこと
 におしと云あはれ妻乃身とてハさぬてハかき
 ざるも天晴負操乃志一感は果余りあり
 何れも汝が申すくは城の難美形事ハ世の内の

浮川竹子身を泥めあはば系太帝が難美ハ形事ハ世の内の
 一つ中を孫侶者ハいま二才の嬰兒形れをぬきは養育男の
 身とありきんまを如や侶者わるとも延連くはるも形れ
 ありとありきんまを如や侶者わるとも延連くはるも形れ
 あはれも世の内の代乃内をとりて少の命子を流へいらあは
 ころも世の内の代乃内をとりて少の命子を流へいらあは
 這等事事夫出字たうへそは能き高儀あり
 世の内の代乃内をとりて少の命子を流へいらあは
 くるも世の内の代乃内をとりて少の命子を流へいらあは
 屋敷のいふふを真形れとて現にその男に在る子



信濃国
麻績之
甲之圖

信濃国麻績之甲之圖

吉

申の事勢なる逆事の不幸乃罪の宿させ玉へとあて打
 倒る撃き罪もあつたれを存命併もせたる涙をおさ
 妻御子等届きりば上の涙ぬく女子勅させる一条子ん成
 定死一日も老早源大高の難をまらひ泣きへ一旬海は
 嬌容まで奪て西三年も身を涙めあい夫乃囚獄も免れあ
 尖陰ハ矢のぞく物く目物さく智もぬ女夫打梅ひいゆ此
 難候と打くかゝるとぬぬ一復源を前も出字法
 うへを身めて逃るぬんが先て身を愛く所ハ何ん
 こせよろろ也近地つるい知音もつるおりてせがけ
 夫の介間も一はれはとさより法を隔ある後乃國

新浮の港ハ懸花此地形れをたぬ一併いもやと女子商候
 涙ぬ夫より旅此粧怪卒小車一近道へを原をのぬ子
 合子也是不出ると傳り喜樂跡ハ侶吉成抱地親子三個
 未明子位刻一麻績乃里を立出ぬ唯さへはる地旅をふ
 おりてや其身を泥せんとも憂容路中をぬる
 喜樂跡横死併自末也助孤子条
 俣も在示併る衣重侶吉を巻連四十余里の道を急
 越後の国蒲原乃形形に渡り女子到り女子知音なりぬき
 傳ふを求る同所中道往屋住七といふ寓家へ娘夜を
 飯賣女子なるもさせやと商儀涙ひくが三年乃の季

みて入口に拾函に書置けり一ゆく孫侶若ハ在示并此懐子
抱既既身列せんとせり時夜半六あゝ及旅路不身を
考るゝにあまゝ親夫系子あもきり列せりあれを歩さ
はらさるも世もあゝきり対時びく今也一と列れを惜み
更に果一もきり在示亦もさぬ一着賺進もおつと乃
あまふをを泥一上六一刻も老早此合をりて原をを救ひ
いづれせむ汝が負んも届た且逕子原を帝も南西へつる
安否をもてせんとも強くも振捨く一嬰見抱き新深乃
渡を立出る頃一も秋の寒中あゝいづれがけ旅路も
在示亦も彼合子あて原を帝を一日も老早助んと急と

されど老足のは果ありて懸く一あまのりが爰に不淋や
ま泊といふ馬ゆ乃間に此比吉山とく一里余此峠あり
此所を阪あり此彦明神乃社ありて大木森くと生養り
南ハ穂摘が浦とくあゝ満くあゝ海上北ハ大山峠とく
岩石盤へさあれあまいけはるりき雲上刺射とくあ
ま流一ヶ所りあゝ物寂寞山中あゝ疾日も西山
子落入ハ喜示并ハ寺深子寓を求せんとんハたあま
いづも難所乃峠子歩行くも一乃岩根後示のゝあま
腰打掛やきりてたゝるも日暮もあまあれハ秋乃
半窓月ハ冷くあれども亦の百傳れに幽寄く茶後子

人もなく青あまのる夜打流乃とくといとくワジ一記
 折社河津 傍乃林の中よりもき葉如記大漢子月代きく
 延きく纏み大ざら流争指お那一きまが喜楽社此の是
 殿お出老人の夜乃乃嘘難幾と一おまきん送る事
 せんと近きさ母子喜楽社扱ハ這奴社山絨ある何卒
 賺一々此難を避むやと想ひ承連も看取こしく
 小見と抱記夜中お及と難候あれども近地つるお其の
 みる目ぐは山坡も海ひ馴さの升苦あも思ひ傳るべ
 くのしもる津の街子所用ありくおらまとおわりのど
 日とくおや傳れどおき路故淋くもおぼくばらるる

過往難信くもうまが格別難取乃苦も忘れ申さん
 におもむ同伴やあつてども赤い疾あれ子とあるをよさふ
 到り今春の夜お止り傳れバ残念あがら連れあり
 か一免させゆへと足疾子行るる脊後より云言腰刀
 援よとく一が喜楽社の首先四五寸啖刺刺断老人の
 呼と云さぬ抱き一雅見取落せせ山上下る苦慮へ
 顛到子墜きりしが中程まで木の根子总後乃袖撒りて
 小見ハ下へ墜もやうん泣叫ぶ喜楽社ハ腰子帯せ
 相に折短刀援持やそれ山絨比魚の某としても
 往古ハ名子遊ふ武士の果あるぞ汝等とてお白々と

目録 卷之十一

目録 卷之十一



喜赤齋
横死の

圖



喜赤齋
横死の

討せんとやと始乃の所を事共せび甲斐く
 城下を血気乃山城刀を原未寸延より壘一討と
 まる所れど手利此老人一往一来勇武奮ひ透り
 つらせば切すくらきか此盜賊の會釋兼透逆を
 跟込く強子刀を打落せど遠去叶いと逃行髪柄
 捕く意友徳負此老人短刀逆手に取直一柄も拳
 も通れよと脊骨より物元へ突せられ狂回く盜賊の
 逆の谷に落るとと何れ何れ此間子六脊後よりあ
 一個の盜賊別れ抜足して觀着奇再亦此頂上
 より洞後追刀を懸ふくきとさかく流石の老人あり

汲び七顛八倒沼田打狂を起りあつて止乃口越くせ
 指通さきむりんと汁を呑み死す然の處と流ぬるあれ
 江果光景より盜賊の前後を詠え家僕が不申せ又此
 老老の強勢を昨子及ぬ罪造りと懐中を捜す兩此
 金を奪ひうち懲味已世合を功く身代を測る原の
 士子まう今一廿云あすたやと獨言して遠よん配
 傍乃苦同に泣く小兒を眼をうけ薬も後日の妨免敷
 捨んばあのと支敷んとを折柄脊後乃がより灯籠
 許多の地連おれ同勢来くるさあま南窓の窓より
 くるくるのさしは息一個控えさるるに糧乃餅食牙

自奉也談記卷之一

五

あつさあつさ... 剣死せん... 這小三... 其身... 法幸... 忍乃... 年んぞ

自來也... 也乃... 抑く... この... 蓋... 赤子の声... 抑... 一個の老人

自來也... 卷二



トイサ
自來也
ミエーニダ
助孤
圖

自來也説古卷之二



自來也説古卷之二

儼乃谷間子ハ幼見の本乃根子掛り泣き居るさぬ不便の情起
 ぬやと自來也彼小兒を助けよせ抱取何所の誰か兒ある
 うハあつたれども便なき光景定て小成れ仕業やもあやせん
 老人も今更悔とも是非も那——此小兒のこゝと助け給せん
 と懐に抱入れ灯籠遺と道をとやせ己が住家へそ連行ぬ
 折自來也の住所とつを越後北国境まで信濃の玉に黒姫
 山といつらう 這山中少度丸茶を築た平日こゝに住して
 奢る者——黄金を丸ハ法玉へ出て注盜成りされ自來也
 拾い——覺を連歸り能く——ま眼中威りし——顔色
 うる——健れお生れ——よこ——消細ふさう代るかん

強付ありぬれをこれと罷たさる中にも父由諸去あつて源太帝
 正村とよめの子勇侶吉高といつるまで明白なりとせば
 何卒救えへ成——遺人と想へども何は乃者といふ事も其
 親乃生子もさうさへ先系方とておひ育ぬ使且使差
 山より夜つて所の者森木跡に死骸をとりけがと願主へ
 係一換便乃縣更きさるる死骸をとりあつた國所の書解
 可ぬれを右此身成信員へ扱合森木跡乃亡骸に違ある
 ちう上るまづ飯小さうおさせ——とせ

勇正村討辨 併 権津国人は拍条

於て信及麻後の里より長年舟楫死の事ありて依れハ村の
 カのともお高義をいふ素より源太郎ハ等々安孝ハ
 者於れ大困窮乃余りせんまて祖税未進ハ嵩如
 二、形身不使の次第ハ孫子今度就在末舟楫死
 事あり一、向方より獄舎の上ハ何せは方よりもわたりて抄換
 申へた子あきハ村役と想ひ村落まで、古市未とを借
 獄舎より助出—、源太郎城彼地へ遺—、古市未とを借
 源太郎親ハ墓傍までを—、復向方(のらひま)も夫まで
 事を解—、助と一、交—、て金を調へ右の始末以縣令廳へ
 於依れハ太早問津ありて源太郎其囚獄を免され村落へ

於て源太郎然る子源太郎ハ世動静を測りて天に作地地子
 憂愁多まへバ奈何ある況ま、越後路まで初—、逢末妻
 子於れ半心さきされば、一方よりねるが先何—、先金か
 地に到りて、其動静成化と信—、此始末村落へ渡を速取目
 旅糶—、其越後の心—、急ためた源太郎山子到り、所の者に子細を
 尋ふ、一向小動靜と、いふ、其系跡其亡骸ハ、上寺に葬—、と
 して、其判形を緋—、父乃埋れ—、其乃率於其の例子—、と
 生—、其子車、と、不孝の兒子身ハ、貧乏子引れ、親人子難と
 うけ、針—、人子子かり、其—、と、奈何ハ、況ハ、未知と、る子、の、父、と
 一、と、其、大事に、事、違ハ、聞、る、為、討、ま、の、せ、一、と、其、口、惜

さよけよ何国乃誰うかれれども敵の行清搜求め僕不戴天の
 讎を討修羅此あれ時させ申さんとそ念れ泪玉を誑香花
 手向て七の日のそ中を重敷地物を放きりとまがくぬひ
 冊たてを河のぬ岫嶺當國の城主推津国久入ま乃行列はく
 一く其身ハ馬上まで僻静と海彦の峰まはりりあ折り
 俄子暴風吹来り大木を吹倒ひ勢ひまそ砂石を飛せ各
 同勢なま子あれまゝあられ一歩も行事終つてまふ馬も
 嘶地懼く進ひば注まぐれく一回まがく一本折りまあ
 折葉原を高く林藤よりく香花りと免事とくと岫所を
 通る金せ一に風の傳へ盛子吹くそ峽まろ一切る崖は樹と

又くりまが遠くは志高穿抜おどく朦く瞳くとりて目指もされぬ
 物凄さ這也何事と国久乃供廻勢地強ぐそ西北の山まれ
 ぶよりもまさと吹まら風おつれ岩石大木とあくとそ着液つて
 石大凡一丈余もつらめと想へる吳形乃乃の権障が同勢の
 中へ踊り入りまむ果事社と衆皆驚慄右性左性は
 逃散る成式を引裂捨倒し此がたたに手負者そ教を
 あらぶべがけしる馬圓の士刀指持港お鞘拔け主人の
 あらむ身付と初とも彼者ハ危者のそく港も刀も奪ひ
 そろ板は反中も己子危くそまふ原を高くは神を遠くそ
 いやのそみの思中といふまがらうまがり人おのやまらあを足捨全



三勇正村
討捕圖

如之如く又其身もても走り進退此子極る不なき、那を
 化を仕留んと觀者奇回もあふこそ、吳形のりの、荊棘の發を
 揺乱し、眼の光を赫くと深太希、目掛跳るるをん、
 非遠なる腰劍拔して丁と切れとも、數身鉄針のどれ毛生て女を
 清政の皮一重も切込されば、彼者倍々、
 多ち引列れんと跳るるを深太希も一世に大事と那者の
 眼に驚きとほけ、抜け、
 焦燥割くると、
 又形のもの、
 又震動夥と眼中より流る血を振る、
 大口明て、

乃多りと刀より、
 曲者作ちねい、
 變化を懼、
 捕く押へ、
 諸共に倒、
 かしと晴天と、
 助よとある、
 採せる、
 看く、
 なる、
 長ハ、
 四五尺あり、
 頰を、
 浪汁の、

自耕也 新法卷之二

猿子幼く物乞は果の毛一尺程免りて後汁は如く是の血
 漬ぐ口中耳隙をそり裂齒の釘はど一衆皆茲を殺く
 奈何ある者や心と有りる時一個つゝこの我猿の救百年
 功程一掃といふあるありと申る者人々古を考て思怖
 一ぬま久の原を而を迫く是れ汝の何なる者あれば唯今の
 衝起歴く武士とふ手余一多子曲者を眼前に仕ある事
 天晴英雄其名聞ありと有りぬれ何計き太人の尊向
 嗚呼ありと有りぬれ某祖父も六代村上家臣が
 神の子細りて民間にふり今ハ信忠の土民を原を為と
 中者もささるると有りぬれ説話を必久信と感ん

あつて勇気とて孝心とて土民をて朽果人の残念の到也
 形事ごもりも一涙の涙あり不是ははらあぬれと今あり
 仕ふるは某が欣悦此上ある事や汝が心座七何と身に
 源太郎頭を傳れ扱あるぬ働を称賞する子孫に
 此れ某と百拍おんとはけは子孫と難有りと云ふ
 申上へき言もね一太早は清仕るなきも古事と某が
 愚父を弟とてあ當所におあつ何者ふ討れ仇の
 弟もあなきに何率老父を教を搜仇を鞠く古父は
 是れ時一ヤ地心頼よぬは此らに一守せし上ハ
 君のたし子孫をさう大馬の骨をそしと有りぬ

自述七言詩卷之二

国久し〜〜〜いりあも其の難中を候子天を不戒乃其を
仇討の心新を至極さう暇が〜説話乃動静を〜教付国の
誰ともあきり面折も足受たとの事あぬを何ふと高き捜求
登壇平術もつるあ〜一子侍あれんや〜一先平が〜
同侍あ〜元の武士に立之〜響〜の同國乃治事も補佐
得手せは仇討の暇も何々平〜も遺兵〜怒る
士とめて教ふ事速務負成せんと亡父も女さす想ふ
が〜と及理をせめての教訓も源を申呼と低平〜
い〜く世上の命子懐ひ〜を〜運子供あし西〜え〜
らんと申を太早乃得ん後とせり〜衣法と改先

ゆきせうとらりぬは平〜運ひて英法を〜着させ指習乃
大小路の旅籠の安とめり供事乃人数加り〜
安人品骨柄勇源を〜心付が出世乃首途をいさ命〜印

自來也説話卷之一終

